

# 教職実践演習に関する一考察

—子育て支援室の環境構成に対する気づきに注目して—

勝間田 明子

## 要旨

こども学専攻の幼稚園教諭免許・保育士資格の取得を目指す学生に対して、2年次後期のカリキュラムの中で開講される「教職実践演習」の授業は、子育て支援センターにおける一日実習への参加と子育て支援教室「すずたん広場」の企画運営を柱として構成されている。

とくに本稿では、学生が後者の「すずたん広場」を主催することによって、それまでの授業内容や実習での学びを有機的に関連付け、その理解を深め、定着を図っていること、また、保育者として社会に出ることへの不安を軽減し、卒業後の職場での同僚との人間関係を構築する際にも有益なコミュニケーションのあり方を学び、卒業後にも支え合うことができる学生間の関係作りにも寄与し得ることを提示する。また、両方の免許・資格を有する保育者養成をおこなう短期大学の過密にならざるを得ないカリキュラムの中で、学生の主体的な学びを引き出すことを目的として、「教職実践演習」を有効に活用すること、および、その活用の方法を提起するものである。

キーワード：教職実践演習，授業連携，子育て支援，環境構成

## はじめに —保育士養成校の課題—

今春、4年制の私立大学のうち入学者が定員に満たなかった学校は46%（全国587校のうち578校が回答。うち、定員割れは265校）であったことが日本私立学校振興・共済事業団の調査によって明らかになった。これは主として高校を卒業する18歳人口の約5万人の減少に起因するとみられており、当該事業団は「今後も新入生の確保が厳しい状態が続く」としている。入学定員が800人以上の大規模校（159校）、そして、都市部の大学の定員充足率も100%を超えていること（例えば、東京110%、神奈川や京都、大阪の105%など）や、その他の調査結果（医歯薬系の学部の定員充足率は100%を超えていること）考え合わせると、とくに地方の小規模校における学生確保の困難さがうかがえる結果となっている。

私立短期大学の場合、この調査に335校のうち320校が回答しているが、定員に満たなかった大学が昨年比で4ポイント増の65%、全体の充足率は91%となり、10年連続で100%を下回ったという<sup>1)</sup>。

いわゆる「定員割れ」をすると、入学試験の「選抜」という役割は機能しなくなる。これまで、高等教育機関は、入学希望者に対して試験を課すことによって、入学後の学修に必要な資

質と基礎学力が備わっているかを測定・評価し、それぞれのアドミッションポリシーに適った学生のみに入學を許可することによって、ある程度、入學者の質を保ってきた。しかし、入學希望者が定員数を下回る大学・短期大学の入學試験は「選抜」というよりも、むしろ、入學者の状況に応じて入學前教育を「準備」するための情報収集の場として機能せざるを得ない。

日本の高等教育機関の入學試験はこのような大きな流れの中にあるが、本学のこども学専攻を含め、保育・幼児教育系の学部・学科の定員充足率は比較的高い数字で推移している。しかし、入試形態の多様化も手伝って、以前に比べると新入學生間の学力および学習意欲の差が開きつつあり、入學後の教育・指導が年々難しくなっていることは否めない。

とくに、2年間で保育士資格と幼稚園教諭の教員免許状を取得し、保育実践を主体的に担っていける保育者を養成するためには、個々の教員が個別に自分の担当の授業だけで奮闘すれば事足りるわけではなく、學生の実態を精緻に分析してカリキュラム構成を徹底的に見直し、全教員が有機的に連動しながら、各授業を関連させることによって、その学びを定着させるような仕組みを創っていく必要がある。とくに本学の「教職実践演習」は、幼稚園教諭免許取得のための必修科目であり、幼児教育の世界へ飛び込んでいく際の心構えと身構えについて学ぶ場として企図されているが、担当教員および學生たちは、こども学専攻のすべての授業の集大成である、という意識を持って演習に取り組んでいる。本稿では、その授業実践の一端を以下に紹介し、複数の授業を連動させ、その学びの定着を図ることの意義と、學生主体の授業のあり方、學生の主体性を引き出すための教員の振る舞い方について考えてみたい。

## 1. 教職実践演習とは

「教職実践演習」とは、2006年7月11日の中央教育審議会の答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」において示された提言を受け、2008年11月、教育職員免許法施行規則が改正されて、「教職に関する科目」に「総合演習」に代わって新設された科目である。「教育職員免許法施行規則第6条第1項の表備考第11号」によると、教職実践演習は「当該演習を履修する者の教科に関する科目及び教職に関する科目の履修状況を踏まえ、教員として必要な知識技能を修得したことを確認するもの」とされるものである。

先の答申では、もう少し具体的に教職実践演習についての説明がされているので、それを引用すると、教職実践演習は「教職課程の他の科目の履修や教職課程外での様々な活動を通じて學生が身に付けた資質能力が、教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認するもの」であり、教職実践演習を履修することによって「将来、教員になる上で、自己にとって何が課題であるのかを自覚し、必要に応じて不足している知識や技能等を補い、その定着を図ることにより、教職生活をより円滑にスタートできるようになること」を期待されているのだという。

この新科目「教職実践演習」の設置は、教職課程および教員免許制度の改革の一環として考

えられるが、本専攻では、2011年度より、鈴鹿市と連携して鈴鹿市子育て支援センターりんりんにおける1日実習と、本学における子育て支援「すずたん広場」を鈴鹿市と共催することの二つを大きな柱とする「教職実践演習」としてプログラムを組むことにした。とくに、保育者として今後ますます重要になってくる「子育て支援」の取り組みについて、実体験を通して学ぶことによって、保育所実習や幼稚園教育実習、児童福祉施設実習では学べない保護者支援の重要性を体得すること、また、子育て支援の分野に対する学びへの意欲を高めることが期待されている。

## 2. 本専攻の「教職実践演習（幼稚園）」の概要

先に、この鈴鹿市との連携プログラムは2011年度より開始されたことに触れたが、とくに今年度からは、教員と学生間の関係をより親密なものにし、また学生間の仲間関係をより豊かに育んで将来に繋げていくために、開講スタイルを変更して少人数制をとることにした。

具体的には、今年度の本専攻の教職実践演習は「2年間の学びの集大成」として学生自らがゼミナール単位で（各ゼミナールの人数は11～13名）およそ2時間の子育て支援教室を企画運営し、これまでに習得した知識や技能を保育実践でいきいきと活用すること、そして、複数の教員が少人数の学生に対して、温かい雰囲気の中で、きめ細かい実践的な指導をおこなうための時間として授業を組み立てたのである。

既述のように、本学の教職実践演習は、鈴鹿市との連携事業の一貫でもあるため、各ゼミナールが担当する回（週に一度、二週間連続で合計2回おこなう）の初回に、鈴鹿市子育て支援センターりんりんの子育て支援コーディネーターが来校し、学生たちの発表方法やプログラムを見てもらうことになっている。ここでの個別的具体的な助言や指導は、学生たちだけでなく、教員にとっても非常に貴重な学びの機会である。以下では、今年度のシラバスをもとに、本専攻の「教職実践演習」のテーマや授業の到達目標、目的を紹介したい。

## 3. 授業テーマおよびテーマ設定の意図

授業テーマは「幼児教育・保育の専門性とは何かを考えながら、幼児教育・保育の実践家として必要な知識や技能、心配りや目配りについて、五感のすべてを駆使して、仲間とともに学ぶ」とした。このテーマで特筆すべきは、「心配りや目配り」、「五感のすべてを駆使」することを重視する部分と、「仲間とともに学ぶ」ことに力点を置いている部分である。

幼児教育や保育の「専門性」を端的にあらわすことは難しいが、単に「専門的な知識があること」や「専門的な技術が身についていること」ではないだろう。その専門性の中には、「心配り」や「目配り」といった人間的な温かい部分が含まれていることは論を待たない。なぜなら保育は、保育実践のなかで子どもたちとともにその生活をいきいきと創りだす、極めて人間的な営みだからである。

この「こころ」や「まなざし」は、映像教材やロールプレイングの手法を使ってある程度、

理解することはできても、保育実践への主体的な関わりなしには、なかなか実感として体得できないような部分であるといえよう。「心配り」や「目配り」の重要性を理解し、その役割を実感として知ることは、保育を実践する上で非常に大切な意味をもつ。したがって、それらを学生自身が習得したいという意欲を引き出せるよう、教員自身が模範として振る舞い、上手くいったことも、いかなかったことも、すべてを教材として捉えて分析を加えることで、これまで、「臨機応変に」とか「状況を見て自分で考える」と伝えてきた箇所を、具体的で多様な「心配り」や「目配り」のあり方を実践から通して学んでほしいと考え、全教員がこの演習に参加することにした。

その方法として、学生自身が全身の全機能を最大限に活用することとした理由は、これまで気づけなかったもの、使ってこなかった感覚や忘れていた感性を磨き、子どもとともに何かを「感じる」保育者になってほしいという願いが込められている。たとえば、しゃがんで視線を下げてみることによって子どもの視線を追体験した上で保育環境を再考し、子どもと同じ気持ちで遊びに没頭することによって保育者としての声掛けの適切なタイミングやトーンについて考え直すことができるだろう。また手元・口元をよく観察して聞／聴こえなかった声に気づくこと、そして子どもの肌の柔らかさ、髪の毛の匂い、子どもを抱っこする親と抱っこされる子どもの醸し出す穏やかな雰囲気など、言葉では表現しきれない様々な生活の場面、いきいきとしたいのちのあり様、子どもの生活に関わり、その生活を豊かにすることに対するたくさんの種類の喜びを実感として味わうことによって保育職に就くことへの責任について理解し、保育職への愛情と希望を持って就職してほしいと思う。

さらに、学生たちがともに保育を創る「仲間」として、仲間と「ともに学ぶ」ことを強調したのは、卒業生の職場における不満、悩みのほとんどすべては、職場において同僚と協力関係を構築することの難しさに起因すると考えられるからである。在学中の学生たちの、話し合いの場に臨席していても、なかなか自分の意見が言えず、不服そうな顔をしている学生があとで個別に相談に来るケースが多い。気の合う人どうしで「楽しいこと」をしたら「楽しい」に違いない。しかし、学籍番号によってランダムに組まれた「ゼミナール」というグループ単位で、企画立案から数々の製作活動まで、決して「楽しい」だけではないことに向き合い、お互いの都合や得手不得手を突き合わせ、支え合いながら、協力してひとつのことを創り上げ、やり遂げるということを学校という場で経験してほしい。学生全員がそれぞれの持ち場で他と寄り添いながら個性を發揮して育つことを願う教員が、潤滑油として適度に働くことによって、どのような形で子育て支援教室を終えることになったとしても、教員が事後の保育カンファレンスで「成功体験として意味づける」ことができるのである。そのため、学生のそれぞれが自己肯定感を強くするものとなり、それは困難を乗り越えて仲間と「ともに生きる力」として記憶され、保育・幼稚園教育で育むことが目指される「生きる力」の一端を実感として知るようになるだろうと考えられる。

#### 4. 授業の到達目標と目的

このような意図をもって定めた授業の到達目標は「これまで習得してきた幼児教育・保育の理論や知識を実践に応用することによって、その理解を深めること」、「子育て支援の取り組みに主体的に参画することによって、幼児教育・保育に関する様々な実践的技能の向上を図ること」、そして「子育て支援の取り組みの企画運営に関わることで、乳幼児およびその保護者との関わり方を実践から学ぶこと」とした。ここで最後の部分に、乳幼児およびその保護者との「関わり方」と記したのは、次のような意味がある。

子育て支援の現場では、乳幼児との関わり、保護者との関わり、乳幼児と保護者という既存の関係との関わり、というように、さまざまな「関わり」が動的に立ち現れるものであり、信頼できる保育者として育つためには、保育の専門家としてのそれぞれの相手に対する関わり方、具体的には、言葉の選び方、表情や立ち居振る舞い等、を習得する必要がある。これを二回の子育て支援教室の企画運営と子育て支援センターでの1日実習で身に付けることは不可能であり、幾多の経験の中で試行錯誤の内に習得していくものであるが、それぞれの「関係」を構築することの難しさとともに、その重要な意義を感じとることはできるだろう。

よって授業の目的は「受講生がこれまでの講義や演習形式の授業、学外における各種の実習で修得してきた保育に関する専門知識や技能を、自分自身で統合し、実践的に応用する能力を身に付けること」であり、「学内外の子育て支援の取り組みに参画」して「実際に子どもやその保護者についての理解を深めるとともに、子育て／子育て家庭の保護者に対する支援の意義と重要性を体得すること」とした。短期大学における学内外での二年間の学びの集大成として、このような形で教職実践演習を企図したのである。

#### 5. 子育て支援「すずたん広場」における学生の気づき

##### 5.1. 保育室における環境構成の重要性

日本の保育所や幼稚園における乳幼児の保育は、環境を通しておこなうものであり、そのことは『幼稚園教育要領』、『保育所保育指針』、『幼保連携型認定こども園保育・教育要領』のいずれにも明記されている。その環境は、物的環境、人的環境、空間的環境、時間的環境の4つに大別できるが、保育者が専門家として保育計画を立案し、保育実践を創っていく場合には、物、人、空間、時間のそれぞれに相応の制約がある中で、対象となる子どもの動きを予測しながら環境を構成して保育をおこなう。

ここで環境「構成」とし、環境「設定」といわない理由は、「設定」の有する「定位置」を示唆するような静的なイメージではなく、予想を超える子どもの動きに応じて環境を組み替え続けていくような動的なイメージでとらえる必要があるからである。

さらに環境は、生態心理学の「アフォーダンス」という考え方によれば、子どもの行為と切り離して考えられるものではない。保育の環境構成の重要性はこれまでも保育現場において経験的にはよく知られていることであったが、現在、それは保育実践に携わっていく過程で経験

知として獲得していくものではなく、科学的な理論構築が可能なものとして、またそうすべきものとして研究が進められている。この環境構成の理論化を目指す研究の先駆的な役割を果たしている高山によれば「適切な環境構成」は「子どもたちに豊かな経験」を与え、「子どもは十分に遊ぶ時間が増え」ることによって情緒が安定し、また「子どもが主体的に行動することが増えると、保育者は、無駄な指示や注意をする必要が」なく、保育者に「子どもたち一人ひとりの行動や言葉を見る余裕が生まれ」、「本当に援助を必要とする子どもにいていねいな関わりを持てるようになる」という<sup>2)</sup>。

保育者が保育を計画し、それを実行にうつす場合、適切な保育環境を構成することこそが、その実践の成否を決するといっても過言ではない。そこで、以下では教職実践演習のプログラムの中でも「すずたん広場」の実践において「環境構成」に対する学生の学びに関して、事例ともに報告し、その意義を検討したい。

## 5.2. 事例1) 環境構成の重要性に対する気づき

プログラムの半ばに「絵本の読み聞かせ」の時間を設定したが、参加した子ども6名（2歳児3名、1歳未満3名）のうち、2歳児3名が絵本に集中することができず、その中の男児1名が壁につけて設置してあった半円形のソファから跳び降りる行為を始めたところ、もう1名の男児がその真似をし、女児が室内を走り回ることになった。(ただし、学生が絵本を読み終え、次のプログラムである「歌あそび」にはいり、ピアノの前奏がはじまった瞬間に、その3名は動きを止めて部屋の中心に集まり、スムーズに次の活動に移ることができた。)

この出来事は、子育て支援教室終了直後におこなった保育カンファレンスにおいて、以下のように「教材」として取り上げ、学生の学びを深める契機とすることができた。

絵本の読み聞かせを担当した学生は、「途中で投げ出したくなかったが、その気持ちを堪えて最後まで読み切った」と話し、非常に落ち込んでいたが、絵本の読み聞かせが上手くいかなかったことの原因は、読み聞かせる学生の「惹きつける読み方の不足」というよりもむしろ、次の二点にあることを教員より説明した。

第一に、絵本選びの失敗（内容が2歳児には難しかったこと）、第二に、環境構成の失敗（子どもたちが座面からジャンプしたくなるような高さのソファを客席側に設置してあったこと）、である。このことを指摘したところ、その翌週は、学生たち自身が環境構成を工夫し、一点目については、絵本の内容を子どもたちがより参加しやすい内容（親しみのある動物や食べ物が登場するものを選び、読む聞かせの際にも子どもたちが応答的な関わりをもてるよう、子どもたちに積極的に問いかけ、視線を合わせ、参加を促すような読み方を心がけた）に変え、二点目については、ソファを撤去し、登りたくなるようなものを部屋に置かないことにして、実践に臨んだ。

すると、前週の読み聞かせの際には動き回って絵本に集中できなかった同じ子どもたちが、絵本に惹きつけられ、読み聞かせをしている学生と応答的な対話を楽しんでいたのである。読み聞かせのプログラムは、時間的には前週と同じくらいの長さで、ほぼ同じ時間帯に設定され

ていたが、2週目の絵本の読み聞かせの時間は、子どもたちが読み聞かせをする学生と生き生きと関わりながら絵本を楽しむ姿を、学生と共に実際に感じられる経験にすることができた。

そして、この直後の保育カンファレンスの際に、学生のひとりが「今回の演習で学んだこと」として、「子どもの動きとソファの有無」と「子どもの集中度合いと、それぞれの月齢・年齢に適した絵本やおもちゃ」といった「子どもと環境の関係」について自分から言及し、「保育における環境設定の重要性がわかった」と述べている。教員側から説明して、環境への気付きを促したのではなく、学生の側からこのような発言が出たことは、教員にとっても大きな喜びであり、この演習の意義をさらに確信するものとなった。教員としては、この環境設定の重要性を保育カンファレンスにおいて説明しようと準備していたが、「忍耐強く、待つこと」、「まず学生の話の聴くこと」の大切さを再確認した。教員側は、学生が意見を形成しやすい環境を作ること、意見を発表しやすい環境を作ることには徹する必要があるだろう。

### 5.3. 事例2) 人的環境としての自分 — 「遊びを発展させる／邪魔しない位置」とは—

先に触れた高山の著作においても「人的環境としての保育者」の重要性は述べられている。そこでは「保育者が自らを意図的にコントロールする要素には、表情、姿勢、動き方、服装、声、話し方など」があるとされ、具体例を示しながら「保育者は、自分の声や動きも、子どもの環境の一部であることを自覚して行動」することの重要性が説かれている<sup>3)</sup>。しかし、この文言を理解していると思われる学生であっても、実習等で保育現場に出るときには、子どもの対応に追われ、周囲からの評価を気にして、自分を客観視する余裕を失い、無意識の自分の言動、つまり、どのように振る舞う傾向・癖があるのか、に気づいていない者が多い。

学生たちは学外実習（保育所実習や幼稚園実習）の際に「子どもの動きや状況をみて、臨機応変に動く」ことが求められるが、その「臨機応変」な動きは具体的にどうすることなのか、子どもの動きの何を見て、どのように自分が動けばいいのかを「講義形式」の授業で学ぶことは難しい。

しかし、この「すずたん広場」では、保育者（＝学生と教員）の数に対して子どもの数が非常に少なく（参加定員の上限は未就園児と保護者10組、学生は13名前後、教員は3－4名である。出席率は天候等に左右されるため、10組が全員参加することはほとんどなく、子どもが1名というときもあった）、また子どもは保護者とともに参加するため、「大人」の数が圧倒的に多いため、子どもと自分が関わるだけでなく、子どもと関わる教員や仲間、保護者の姿を見ながら、比較的余裕を持って自分の立ち位置や関わり方を探っていくことができる。

とくに、この「すずたん広場」を開催する保育室の広さと天井の高さの関係で、例えば学生たちが3名並ぶだけで「壁」のような存在感を放つ。子どもの活動を見ることに集中する学生によって無意識につくられてしまう「壁」は、子どもの視界を遮り、空間を分断し、遊びの展開を妨げてしまうが、教員がそれをそっと指摘することによって、自分を俯瞰的にみることが可能になる。そして自分が少し移動するだけで「壁」は消滅し、子どもの活動が目に見えて広がっていくことを実感できるのである。

この「自分の動き」がつくる環境についての気づきは、保育カンファレンスの中でも再三、反省事項として学生自身の口から語られている。このことから、「すずたん広場」での実践が「自分の位置」と「動き」を常に客観視し、子どもの活動を予測しながら主体的に環境を創っていくことの重要性を体得するための効果的な役割を果たしていることがわかる。そしてこの事例から、学生の主体性を引き出すために教員がすべきことは、「学生自身の無意識の部分にそっと働きかけ、本人の意識を向かせることである」ということができよう。学生自らが主体的に動きたくするような環境をつくり、それぞれの主体性が発揮されるのを待つことこそが、教員に求められているのである。

## おわりに

本稿に掲載した事例は、「教職実践演習」で得られた実践的な学びの一端を記したものである。この「すずたん広場」は、学生が、参加する子どもの主体性と笑顔に助けられ、子どもに教わりながら、子どもとともに育つ場である。また、この文の「子ども」を「仲間」に換えて、仲間に助けられ、仲間に教わりながら、仲間とともに育つ場、であるとも言えるし、さらには、教員も、学生に助けられ、学生に教わりながら、学生とともに育つと言うこともできる。

この「教職実践演習」は、保育者になることを志してこれまでの授業で習得してきた子どもの発達や幼児教育教師論で学んだ理論的な側面、子どもの文化や遊び、造形や表現に関する技術や保育内容の五領域の演習の授業内容のすべてを総動員し、組み合わせて活かすことを必要とする。したがって「教職実践演習」は、すべての授業の集大成として機能することになるが、このことは逆に、それぞれの授業内で習得する内容が、たとえば「教職実践演習」ではどのように活かされるのか、という提示の仕方ができたとすれば、保育のイメージがふくらみ、学生たちはより積極的に授業に取り組むようになると考えられる。さらに、各授業が「教職実践演習」を紐帯として繋がっていくことで、各教員間の連携を強化する方向に働くことが期待される。

なお、事例の中では触れなかったが、参加する保護者は、この「すずたん広場」の「規模の小ささ」に魅力を感じているという。学生たちの真摯な態度と一生懸命さに触れ、この何かを広場で「何か役に立つことを教えてもらいたい」というよりも、その優しくて穏やかな雰囲気味わうことを目的とし、「心地よい居場所」として数ある「子育て支援」事業の中から、「すずたん広場」を選んで参加しているのである。

厚生労働省のホームページによると、「子育て支援」とは、「子どもを生み育てることに喜びを感じられる社会を目指して」おこなわれ、その施策は「次代の社会を担う子ども一人ひとりの育ちを社会全体で応援するため、子育てにかかる経済的負担の軽減や安心して子育てができる環境整備のため」に実施されるものであるという<sup>4)</sup>。「子ども一人ひとりの育ち」も、その保護者の思いも千差万別であり、だとすれば「安心して子育てができる環境」も多種多様であるだろう。「すずたん広場」での子育て支援実践が通年の事業として始まったのは今年の6月から



であり、その役割や意義についてのデータに乏しく、客観的な検討もできていない。しかし、毎回、参加を楽しみにしている親子がいるという事実は、そのニーズの確たる証拠であり、来年度以降の子育て支援事業の展開の方向性を考える際の重要なファクターとして捉えるべきだろう。そして「すずたん広場」での学びが学生のどのような部分にどのような意味を持ち得るのか、という点について、さらに分析と検討を重ね、短期大学での学びの集大成として、より充実したプログラムにするべく、教員自身も学び続けなくてはなるまい。

学びは、本来、楽しいものである。自分が他者と仲間関係を築き、仲間を認め、仲間の中で認められることは、嬉しいものである。このことに学生が気付けば、学生は自ら変わり、仲間をつくり、学びはじめる。このことを教員が確信し、実践することで、それをモデルとして学ぶ学生の「先生像」や「子ども観」は変わり、子どもの主体性を信じ、待つことのできる保育者として育つだろう。

学生も教員も、子どももその保護者も、見る主体であると同時に見られる客体として存在し、さらには各々が主体的に学ぶ存在であることを常に意識しながら、今後は、この「すずたん広場」における様々な出来事を教育実践として捉えて、理論的な意味づけをして、教材としてまとめ、他の授業においても活用できる形にすることを目指したい。

## 引用文献

- 1) 日本経済新聞 WEB 刊 (2014 年 8 月 7 日) : 私大 ほぼ定員割れ 人口減, 小規模校ほど苦戦 [http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG0702W\\_X00C14A8CR8000/](http://www.nikkei.com/article/DGXLASDG0702W_X00C14A8CR8000/) (最終アクセス 2014 年 10 月 30 日).
- 2) 高山静子 (2014) : 『環境構成の理論と実践』, エイデル研究所, 3 頁.
- 3) 同上, 36-37 頁.
- 4) 厚生労働省 : 子どもを生き育てることに喜びを感じられる社会を目指して, [http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo\\_kosodate/](http://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/) (最終アクセス 2014 年 12 月 8 日).

## 執筆者の所属と連絡先

所属 : 鈴鹿短期大学 こども学専攻 Email: katsumataa@suzuka-jc.ac.jp

# Student-Centered Classes as a Program of Practical Training for Teaching Profession

Akiko Katsumata

## Summary

'Suzutan Hiroba', which is the child-care-support project in Suzuka Junior College, is organized as a practical training for teaching program for the second graders. This project is a practical and student-centered class, being different from the conventional style of classes in which students carry out deskwork.

This paper shows that this style of the classes has effective points, such as 1) Giving some recognition of the relation between the knowledge they have learned in classroom and the practice they will give in the future as a nursery teacher 2) Reducing uneasiness of becoming a nursery teacher 3) Building good relationship among students.

Key Words: Practical Training for Teaching Profession, child-care-support project, student-centered class, nursery teacher